

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25年6月14日現在

機関番号：64303

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21320085

研究課題名（和文） 南アジア諸言語の類型論的研究－南アジア言語領域論の再検討

研究課題名（英文） Typological Studies on South Asian Languages-  
Rethinking on South Asian Linguistic Area

研究代表者

長田 俊樹（OSADA TOSHIKI）

総合地球環境学研究所・名誉教授

研究者番号：50260055

研究成果の概要（和文）：

南アジアの諸言語は、歴史的観点から、インド＝アーリヤ、ドラヴィダ、ムンダ、そしてチベット＝ビルマの4つの言語グループに大別できるが、言語接触の結果、こうした語族／語派を横断した共通の特徴を有するようになったとされる。こうした地域特徴は「南アジア（またはインド）言語領域論」として議論されてきた。本研究では、この「南アジア言語領域論」を批判的に検証するため、その基盤となる南アジア言語地図を出版した。

研究成果の概要（英文）：

There are four major language family in South Asia; i.e., Indo-Aryan, Dravidian, Munda and Tibeto-Burma. These languages shared same linguistic features because of language contact. The study on South Asian linguistic area was focused on these linguistic features. We examined these linguistic feature then we published the Language Atlas of South Asia (LASA) from the South Asian department, Harvard University as a result of our research work.

交付決定額

（金額単位：円）

|        | 直接経費       | 間接経費      | 合計         |
|--------|------------|-----------|------------|
| 2009年度 | 4,800,000  | 1,440,000 | 6,240,000  |
| 2010年度 | 3,300,000  | 990,000   | 4,290,000  |
| 2011年度 | 2,900,000  | 870,000   | 3,770,000  |
| 2012年度 | 2,900,000  | 870,000   | 3,770,000  |
| 年度     |            |           |            |
| 総計     | 13,900,000 | 4,170,000 | 18,070,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：南アジア諸言語、言語領域論、言語類型論

## 1. 研究開始当初の背景

南アジアの諸言語は、歴史的観点から、イン

ド＝アーリヤ、ドラヴィダ、ムンダ、そしてチベット＝ビルマの4つの言語グループに

大別できるが、言語接触の結果、こうした語族／語派を横断した共通の特徴を有するようになったとされる。こうした地域特徴は「南アジア（またはインド）言語領域論」として議論されてきた。本研究では、この「南アジア言語領域論」を、二つの方向から批判的に検証する。

第一は、これまで漠然と類似点だけ強調されてきた感のある「地域特徴」を、それぞれの言語グループに属する個別言語レベルの文法記述によって、いわばボトムアップの方法で詳細に検証することである。具体的には、研究代表者／分担者として参加するこの4言語グループの専門家が、従来地域特徴として論じられてきた三つの重要な文法現象－「感情語」、「与格主語」、「複合動詞」－を中心に、それぞれが専門にする個別言語および周辺言語の現地調査によるデータに基づいて、詳細に記述する。

第二に、これと並行して、最近発展著しい言語類型論の成果に照らし合わせ、これら個々の「地域特徴」の言語学的基準そのものや、その現象が南アジア以外の世界の諸言語にどのように現れているかを検討する。このような過程を通して、「南アジア言語領域論」の概念の有効性そのものを、広い見地に立って再検討する。

南アジア言語領域論は、1956年にエメノーが発表した論文を嚆矢とする。エメノーは、異なった語族に属する言語が、長い間の言語接触の結果、語族を超えて共通の特徴を持つに至ったとして、そういった言語接触地域を言語領域と名付け、インドが言語領域をなすことを指摘した。その後、マシカがその地域特徴を精査しまとめ、これをきっかけにインド領域論が1980年代に広く行われた。しかし、1990年代に入ってから、この南アジア言語領域論はあまり進展してこなかった。

そこで、インド言語領域論の停滞を鑑みると、個別言語レベルからの詳細な分析を行ない、言語類型論の最新の研究成果を取り入れた、総合的な検討を行なう時期に来ていることは間違いのないとの判断から本研究をはじめた。

## 2. 研究の目的

研究代表者の長田は、かねてから、南アジアの諸言語の文法的特徴を、フィールド研究による詳細なデータの記述というボトムアップのアプローチと、類型論的立場からのトップダウンのアプローチを組み合わせることに関心を持ち、類型論研究の第一人者であるオーストラリア国立大学の Nick Evans 教授とともに共同研究を行ってきた (Evans & Osada 2005 参照)。そして、2007年5月より、長田がリーダーを務める「インダス文明と環境変化」プロジェクトの中に「インダスプロジェクト言語研究会」を立ち上げ、本研究の研究分担者および連携研究者であるメンバーと定期的に研究会を開いてきた。その研究会の主要メンバーでもある本研究の研究代表者／分担者は、いずれも、それぞれの言語グループの個別言語の記述に、20年以上取り組んでいる。

本研究の中心課題として取り上げるのは、これまで「地域特徴」として論じられてきたテーマのうち、文法的に重要で、その分析に特に問題が多く、また類型論研究の点でも興味深い現象、すなわち (1)「感情語」、(2)「与格主語」、(3)「複合動詞」の3つである。これらのテーマのうち、(1)「感情語」については、長田が科研でムンダ語の「感情語」を研究してきた経緯があり、(2)「与格主語」については、上述のように、長田、大西がある程度の実績を残している。また、(3)「複合動詞」は、多くの先行研究があるが、定義や用語が混乱していて議論がばらばらであ

り、改めて規準を定め、個別言語のデータに基づいて再検討することが要請されている。そこで、「感情語」、「与格主語」、「複合動詞」の3項目に関する、「南アジア言語領域論」における先行研究と、これらの項目に関する言語類型論の研究とをつきあわせ、暫定的なパラメータを立てる。これらはすべて、複合的な文法現象であり、音韻、形態、統語、談話構造に至るさまざまな側面を持つため、それらに配慮した複数のパラメータを立てる必要がある。これらのパラメータに基づき、ムンダ語（長田）、ベンガル語（大西）、テルグ語（児玉）、キナウル語（高橋）について、自然発話やエリシテーションを含む詳細なデータを収集、データベース化と分析を行なう。また、同グループの他の言語に関しても、現地調査や先行研究を通じて補足データを集める。初年度は「感情語」、2年度目は「与格主語」、3年度目には「複合動詞」を中心に調査を行ない、詳細なデータベースを構築、研究の基礎を築く。

本研究が他の研究にはない特徴として、以下があげられる。南アジアの現代諸言語の研究は、伝統的にインド学と呼ばれてきた古典語サンスクリットの研究に比して比重が小さく、研究者も少ない。これらの言語の文法現象や、類型論的特徴の詳細が明らかにされることは、日本においても、世界的にみても画期的である。

「南アジア言語領域論」と言われながら、チベット＝ビルマ語族も含むすべての言語グループに同じ言語学的基準をあてはめて地域特徴を分析した研究は、行われていない。本研究は、厳密な意味で、インドの諸言語への「言語領域論」の有効性を検証する、はじめての試みと言える。

チベット＝ビルマ諸語は、従来南アジアの言語とは切り離されて研究される傾向にあ

った。本研究のような類型論的な比較研究は、この点で、チベット＝ビルマ諸語研究にも新たな地平を切り開くことが期待される。

### 3. 研究の方法

研究代表者の長田はムンダ語を中心とするムンダ語派のデータ収集と分析の責任を持ち、研究分担者の大西はベンガル語を中心としたインド＝アーリヤ諸語の、研究分担者の児玉はテルグ語を中心としたドラヴィダ諸語の、そして研究分担者の高橋はキナウル語を中心としたチベット＝ビルマ諸語の、それぞれデータ収集と分析の責任を持つ。総括責任者である長田は、あくまでも研究分担者間のまとめ役に徹する。4年の研究期間を通じて、月に一度、定期的に研究会を開催し、お互いのデータ収集と分析の情報交換を行なった。

### 4. 研究成果

最初の計画では、初年度は「感情語」、2年度目は「与格主語」、3年度目には「複合動詞」を中心に調査を行ない、詳細なデータベースを構築、研究の基礎を築く予定であった。ところが、ここの地域特徴を取り上げるのではなく、これら地域特徴に留意しながら、ここの言語の文法記述をおこなう方が重要ではないかという判断から、大西はベンガル語文法、児玉はテルグ語文法、高橋はキナウル語文法、長田はムンダ語文法の概略をまとめ、その中にここの地域特徴を盛り込む方向に途中で、研究内容を一部変更した。そのことはすでに途中の時点で、報告をしている。この方向に変更した大きな理由は、南アジア諸言語の言語地図をまとめる上で、ここの言語に関する文法概略の方が地域特徴よりも重要だと感じたからである。

その結果、南アジアの諸言語に関する地図は

Language Atlas of South Asia (LASA) として、ハーバード大学から刊行することができた。この地図上に、地域特徴等をプロットすることも考えたが、この地図の中で、それぞれの言語の特徴を祖述することで、この科研の目的である、言語類型論に基づいた南アジア諸言語の地域特徴をある程度明らかにすることができたのではないかと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ①児玉望(2013)「種子島二型アクセントの境界特徴—自発談話音声資料の分析」『ありあけ 熊本大学言語学論集』12. pp31-50. 査読無
- ②高橋 慶治 (2013)「キナウル語の述部構造について」澤田英夫(編)『チベット=ビルマ系言語の文法現象 2: 述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp. 203-24. 査読有
- ③Yoshiharu Takahashi (2012) `On a middle voice suffix in Kinnauri (Pangi dialect), In Wataru Nakamura and Ritsuko Kikusawa eds., *Objectivization and Subjectivization: A Typology of Voice Systems*, Senri Ethnological Studies 77, Osaka: National Museum of Ethnology, pp. 157-75. 査読有
- ④高橋 慶治 (2012),「キナウル語(パンギ方言)の時制接辞について」『地球研言語記述論集』4, 京都: 言語記述研究会(総合地球環境学研究所インダスプロジェクト), pp. 1-12. 査読無
- ⑤Nicholas Evans, Toshiki Osada (2011) Mundari reciprocals, In Nicholas Evans, Alice Gaby, Stephen Levinson and Asifa Majid (ed.) *Reciprocals and Semantic Typology*. John Benjamin, Amsterdam, 査読

有.

- ⑥長田俊樹 (2011) Grammatical outline of Mundari. 遠藤光暁 (ed.) *Papers in Austroasiatic and Austronesian Linguistics*. 東ユーラシア言語研究会, pp.39-67. 査読無
- ⑦Toshiki Osada (2009) How many Proto-Munda words in Sanskrit? — with special reference to agricultural vocabulary. Toshiki Osada (ed.) *Linguistics, Archaeology and the Human Past in South Asia*. Manohar, Delhi, pp.127-146. 査読無
- ⑧児玉望(2009)「テルグ語」『事典 世界のことば141』大修館書店。査読無

[学会発表] (計6件)

- ①Onishi Masayuki(2012) Documentation of Endangered Languages and Cultures, Visiting seminar, Sikkim University, Ghantok, Sikkim, India.
- ②Onishi Masayuki (2011) The Language and Culture of Rajbansis from a Global Perspective, Keynote Speech, International Workshop on Koch-Rajbansi Language and Culture, Kokrajhar, Assam, India.
- ③Osada Toshiki(2011) An Ethnolinguistic Study of Munda Rice Culture in Jharkhand, India. *Rice and Languages across Asia*, Cornell University.
- ④Osada Toshiki(2010) A comparative study of Munda creation myths. Radcliffe Exploratory Seminar on Comparative Mythology, Harvard University.
- ⑤Toshiki Osada (2009) Echo formation in Mundari. *Austroasiatic Linguistics International Conference*, Mahidol University, Salaya, Thailand.
- ⑥Toshiki Osada (2009) Rice rituals in Mundari. *Himalayan communities, cultures*

and traditional knowledge, Binsar, India.

〔図書〕(計12件)

①ニコラス・エヴァンズ著(大西正幸・長田俊樹・森若葉訳)『危機言語—少数言語の消滅で人類は何を失うのか』。京都大学学術出版会。

②Osada, Toshiki and Masayuki Onishi (eds.) (2012) Language Atlas of South Asia, Harvard Oriental Series, Opera Minora, Vol.8. Department of South Asian Studies, Harvard University. 164頁

③Osada Toshiki and Michael Witzel (eds.) (2011) Cultural relation between the Indus and the Iranian Plateau during the third millennium BCE. Department of South Asian Studies, Harvard University. 382頁。

④Osada Toshiki and Hitoshi Endo (eds.) (2011) Current Studies on the Indus Civilization Vol.9. Manohar, Delhi. 269頁。

⑤Osada Toshiki and Akinori Uesugi (eds.) (2011) Current Studies on the Indus Civilization Vol.7. Manohar, Delhi. 187頁。

⑥Osada Toshiki and Akinori Uesugi (eds.) (2011) Current Studies on the Indus Civilization Vol.5. Manohar, Delhi. 109頁

⑦Osada Toshiki and Akinori Uesugi (eds.) (2011) Current Studies on the Indus Civilization Vol.4. Manohar, Delhi. 178頁。

⑧Osada Toshiki and Akinori Uesugi (eds.) (2010) Current Studies on the Indus Civilization Vol.3. Manohar, Delhi. 109頁。

⑨Osada Toshiki and Akinori Uesugi (eds.) (2010) Current Studies on the Indus Civilization Vol.2. Manohar, Delhi. 137頁。

⑩Osada Toshiki and Akinori Uesugi (eds.) (2010) Current Studies on the Indus

Civilization Vol.1. Manohar, Delhi. 178頁。

⑪Osada Toshiki (ed.) (2009) Linguistics, Archaeology and the Human Past in South Asia. Manohar, Delhi. 263頁。

⑫ Osada Toshiki (ed.) (2009) Indus Civilization: Text and Context Vol. 2. Manohar, Delhi. 170頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

長田 俊樹 (OSADA TOSHIKI)  
総合地球環境学研究所・名誉教授  
研究者番号: 50260055

### (2) 研究分担者

大西 正幸 (ONISHI MASAYUKI)  
総合地球環境学研究所・客員教授  
研究者番号: 10299711

高橋 慶治 (TAKAHASHI YOSHIHARU)  
愛知県立大学・外国語学部・教授  
研究者番号: 20252405

児玉 望 (KODAMA NOZOMI)  
熊本大学・文学部・教授  
研究者番号: 60225456

### (3) 連携研究者

森 若葉 (MORI WAKAHA)  
国士舘大学・イラク古代研究所・研究員  
研究者番号: 80419457

寺村 裕史 (TERAMURA HIROFUMI)  
国際日本文化研究センター・特任准教授  
研究者番号: 10455230